

議 事 録

- 会議名 第 22 回佐賀県総合教育会議
- 開催日時 令和 4 年 3 月 22 日（火曜日）10 時 ～ 11 時
- 開催場所 佐賀県庁 新館 4 階 プレゼンテーションルーム
- 出席者 山口知事、落合教育長、牟田委員、加藤委員、飯盛（清）委員
飯盛（裕）委員、荒木委員
（知事部局）進政策部長
（総合教育会議事務局）前田政策総括監、他
- 議題 （1）子どもたちが「佐賀の魅力」を語れるための取組について意見交換
（2）令和 4 年度の重点的な取組について意見交換

○議事録

1 開会

○前田政策総括監

それでは、定刻になりましたので、ただいまから第 22 回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

私は本日の進行を務めさせていただきます政策部の前田でございます。よろしくお願いいたします。

本日は山口知事、落合教育長、教育委員の皆様のほか、政策部の進部長が出席をしております。

それから、荒木委員におかれましては、昨年 12 月に教育委員に就任をされまして、今回、初めての御参加でございますので、自己紹介を賜ればと思います。

○荒木委員（あいさつ）

佐賀大学保健管理センター、佐賀大学ダイバーシティ推進室からきました荒木といいます。もともと小児科医をしておりまして、2017 年から大学のダイバーシティ推進室で副室長、そして、保健管理センターで医師をしております。初めての経験でわからないことも多いですが、とても子どもが好きです。佐賀のために頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

○前田政策総括監

ありがとうございました。

それでは、山口知事から御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

2 知事あいさつ

○山口知事

皆さんおはようございます。荒木先生はリケジョです。リケジョはいなかったわけで、豊富な経験もお持ちですし、ダイバーシティについても専門家であられるし、もともと佐世保ということもありますから、いろんな観点で佐賀県に、佐賀県大好きということでお話も承っているの、いろいろ自由に御発言いただいて、ざっくばらんな会議なので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

それで、今日のテーマは「佐賀の魅力」ということでありまして、それこそ、佐賀県はSAGAスポーツピラミッド構想ということで、全国で唯一無二というか、非常に前向きで革新的な事業、構想を打ち立ててやっているわけですけど、早速、昨日、佐賀商業の女子が初めて全国制覇、団体戦でしたということで、何か井上先生も頑張っていたいて、みんなでこうやって気持ちを一つに戦略を持ってやると成果は表れるなど。今頃本当はやるはずだった有田工業野球部も、この総合教育会議の中でいろんな議論をする中で、佐賀県の個性を生かしたような学校づくりをするということで、王座奪還プロジェクトを手がけた瞬間に選抜に出場するということになりまして、やっぱりずっとこれまでの「もんだ症候群」、こうするもんだというずっと昭和のときからの同じような流れをただ単に踏襲するだけではなかなか生まれえない、いつも言ひますけれども、昭和の時代のように多くの同じような生徒たちを育てて、同じような企業戦士にするという時代ではないので、一人一人個性豊かに磨いていくという、さらにこれからは今は国際社会も非常に変動していますし、国際人として、そして、自らのふるさと、故郷をしっかりと世界に向けてしゃべれる、それは別に大層なことじゃなくて、ふだん観光客が来たり、そういうときでもうちのふるさとはこういうところだよって自信満々に話せるような、そんな子どもたちがいっぱいいて、そういうことを前向きな生きる力に変えてほしいなというふうに思ひています。

そういった意味で、佐賀県は弘道館以来、常に、そして、初代文部卿を生み出しましたし、ずっと学制発布も佐賀県人が考えた、言うなれば日本の教育政策というのは佐賀県人の発想から生まれたようなものでありますから、我々自身がその国全体の方向性の風下に下るなんてことはあり得ない話でありまして、我々自身が真に教育というものはどうあるべきなのかということ、前向きに考えていくような、そういう県だというふうに私は自負しているわけなんです。

そういうことも踏まえて、子どもたちに佐賀で育てられた、佐賀で育ったということは何なんだろうかということについて考えていただけるような取組ということについて今日は議論させていただきたいというふうに思ひています。それは、熊本や福岡、大分じゃなくて、長崎じゃなくて、佐賀なんだろうということですね。すばらしい取組という意味じゃなくて、佐賀って何なんだろうかということについてどう考えるのかということと、もう一つ、最近ちらほら考えていることとして、自分も子育てしてきたわけですけど、むしろ都市部に山口家が住んでいたときのほうが、子どもたち同士で山手線、東京行った時、山手線乗ってどこか遊びに行ったりとかですね、非常に冒険をしてきたような。こちらに来ると、

意外とほかの地域に子ども同士で行くということがない。逆にバス乗れない、汽車に乗れない。せっかくこういう人情味豊かなところにいるのに、本当にそれで急に大学生ぐらいになってから都市部に行く人はそれで困ったり、ほんのちょっと宇宙科学館に子ども同士で行かせるとか、そういうところというのは何となくできないものなのかなというふうに思うんですけども、やはり僕らは家庭の中ではいろんなことを企画しますけれども、例えば、学校で一定の制約をつけてしまうと、学校の制約というのはなかなか外せないんですね。ずっと今までのこの総合教育会議での議論をしても。一旦つくった校則というのは10年、20年、30年解除するというのがなかなかできないので、それってなかなかどういうものなのかなと。だから、もともと学校の役割と家庭の役割というのはそもそもあるんでしょうけれども、どの辺りがバランスがいいのかなということも含めて、もし議論ができたらいいなというふうに思います。よろしくお願いします。

3 内容

<テーマについて説明>

○前田政策総括監

それでは、本日の議事に入らせていただきます。

本日は、子どもたちが「佐賀の魅力」を語れるための取組と、教育委員会の令和4年度の重点的な取組、この2つのテーマについての意見交換となります。

まず1つ目のテーマでございます、子どもたちが「佐賀の魅力」やよさに自ら気づいて自分の言葉で自信を持って語れるようになるためにはどのような取組などが考えられるのかということについて意見交換をお願いしたいと思います。

次をお願いします。

この総合教育会議におきまして、これまでも皆様から今回のテーマに関しまして様々な御意見がございました。例えば、佐賀にはいろいろな魅力があることに気づかず、佐賀は何もないと言っているのは大人や親のほうで、大人の意識が変われば子どもたちに伝わっていくのではないかという御意見や、学校の先生ということでは、維新博などを通して、小・中学生にたくさん種をまいたので、どうやって育てるかは先生方の指導による。そうした中で、やはり先生が佐賀のことが好きではないといけないという御意見、それから、東京や福岡と比べて佐賀はどうなのかといったように、都会的なものに対する気持ちは強く、マスコミや都会からの情報に流されているのではないか。そして、佐賀の本物の魅力やすごさといったようなものは、佐賀以外のいろんな場所を見てきた人であればこそ分かるなどの御意見がございました。

それから、ここには書いてございませんけれども、今回のテーマに関する高校生の声ということで幾つか御紹介をしたいと思います。県では、高校生が佐賀の魅力を生かした企画をプレゼンする「佐賀さいこう！企画甲子園」というものを開催しております。この事業は担当課のほうで今年度参加した高

校生と意見交換を行っておりますけれども、幾つか声を紹介しますと、都会的なものということの比較という点では、買物する場所やテーマパーク、例えば、福岡の天神とか長崎のハウステンボスと、こういったものがないと。あるいは交通手段が少ない、便数が少ないといった意見でありますとか、県外から見た佐賀の評価というところなんですけれども、県外の人から佐賀の何々が素晴らしいと言われて、当たり前だと思っていたことがすごいことなんだと初めて気づいた、あるいは佐賀の人にすごいと言われるよりも、県外の人にほめられたほうが実感ができるといったような意見もございました。

そして、佐賀の有名なグルメとかは食べたこともないし、友達同士で温泉に行ったこともない。要するに、経験や体験したことがないという意見、それから、ネットで佐賀は何もないとほかの県の人が書き込んだ情報を見るといったような意見もございました。

こうした高校生の中には、佐賀の魅力を結構知っていて、質問すれば答えきれなのに、何となく何も言っていないと言っている生徒もいるのではないかとといったような印象を持ったということでございます。

私からの説明は以上です。

次に、落合教育長から説明をお願いします。

○落合教育長

私のほうからは、学校の中でふるさとについてどのようなことを取り扱っているかというのを御紹介したいと思います。

基本的には、佐賀県のよさを知り、佐賀のことを誇りに思う、そういう生徒をつくりたい、育てたいということなんですけれども、県の教育としては、志を高める教育を一番の柱にして、その中で、佐賀を誇りに思う教育について取り組んでいるところです。

その年代によって扱う内容は違ってきますけど、小学校によっては、主に社会科の中で学年を追うごとに自らの地域、市町から県、そして、日本全体のことを学んでいく。そういった中で、それに併せて修学旅行なんかもそういうところに行くような企画になっています。

中学校においては、主に総合的な学習の中で地域の伝統文化などを学ぶ、そういう中で、今日お手元のほうに配っていますけれども、「佐賀巡り」などの副読本を使いながらやっているところです。

高等学校のほうでは、総合的な探求の時間などを使って佐賀県のことを学ぶ力というのをつくっています。これは「佐賀語り」という副読本がありますが、そういったものも使いながら、最近ようやくですけども、地域としっかり連携した取組、唯一無二の学校づくりに取り組んでいますけれども、そこに幾つか事業を挙げていますけど、学校と地域がしっかりタッグを組んだような取組がなされてきているという状況です。

こういったところで、学校の中でそれぞれの年代に応じた取組をやっていますけど、どこまで子どもの心のど真ん中に届いているかというところは今日大いに議論させていただきたいと思います。

以上です。

(1) 意見交換（子どもたちが「佐賀の魅力」を語るための取組について）

○前田政策総括監

ありがとうございました。

それでは、ここから意見交換をお願いしたいと思います。それぞれお考えなどございましたら、よろしく願いいたします。

○落合教育長

そしたら、飯盛先生のほうから順番に。

○飯盛（清）委員

今日、ちょっと来る途中に寄って借りてきたんですけれども、3年生で「私たちの佐賀市」という副読本を使います。これは佐賀市の場合ですね。唐津、伊万里、それぞれで作っている副読本があります。これが4年生で「私たちの佐賀県」という副読本で、これは県全体で使っているんですが、さっき社会科の全体の県の会長をしている校長に聞いてきたんですが、市町によっては予算の関係で作れていないところもあると。小さな町であれば冊子にするのにかなり予算がかかりますので、これも市町によっては採用されていないところがあると。できるだけたくさん使ってくれるように頼んでいるんだけど、これも予算の関係なんでしょうか、そういったことがあるということでした。

さっきお話を聞きながら、本にするという形が当たり前だったんですが、今はやろうと思えば、さっきも向こうでちょっと話が出ていましたけれども、ネットを使えばそんなにお金がかからなくてできるんじゃないかなという時代でもあるのかなということを私も気づきました。

あと、低学年、1年生、2年生は生活科に入れていきますフィールドワーク、地域の公民館に行ったりとか、そういったことから始めて、3年生、4年生で自分たちの地元を詳しく調べて、5年生、6年生では総合的な学習でさらに自分の学校の特色のある地域行事とかそういったこと、中学校でも結構やっているみたいです。ただ、それが最近、SDGsが言われるようになってきて、総合的な学習でそっちに移っていこうとしている学校が結構多いんじゃないかなという気がしますので、そこら辺の兼ね合いといたしますか、地域の学習もしっかり続けてほしいなという思いがあります。

以上です。

○飯盛（裕）委員

さっきちょっと飯盛（清）委員が触れられていたんですけど、先日、うちの職場に佐賀に移住をしたいという職員がいて、海外から戻ってきて、大阪の方なんですけど、佐賀で仕事がしたいということで

うちに入ってもらったんですね。県庁の1階に移住支援室があったので、そこでちょっと登録をしてもらって、SAGA SMILEカードいうものを発行してもらって、一緒に来た冊子というか、パッケージの中にマスクケースがあったんです。そのマスクケースの一角にQRコードがあって、これをスキャンしてもらったら佐賀のいいところがいろいろ載ったデジタルブックがあるので、ちょっと見てみてくださいという説明があったので、私はちょっとスキャンして見てみたら、結構いろいろ書いてあるんですね。だから、こういうのをもっと広めていくと、より多くの人たちに佐賀の魅力を知ってもらえるのかなと。

例えば、うちは職員の名刺にうちのホームページのQRコードを載せているんですけど、裏のほうとかにここをスキャンしてもらったら佐賀のことをちょっと知ってもらえますよみたいなのを名刺につけてもらうとより多くの方に見てもらえるのかなと思った次第です。

皆さんのおっしゃられるとおり、冊子にするよりもデジタルって今いろいろ簡単に広めることができますし、何か修正があったときも、修正すると最新のものがデジタルで手に入るの、ここはすごくいいなと思った次第です。

○牟田委員

今、飯盛（裕）委員が言われたことはぜひすぐやって。名刺にするだけだから。

○進政策部部長

職員の名刺まで入れておくのはいいですね。それですぐその場で話もできますしね。

○飯盛（裕）委員

東京とか行かれたときも、ここをスキャンしてもらったら佐賀のいいところや魅力がわかるので。

○牟田委員

4月に配置転換とかで名刺を変えたり。

○落合教育長

大体変えるかな。

○進政策部部長

はい、作りますよね。

○山口知事

この話題になると、毎回僕にとって違和感があるのは、結局、こういう佐賀巡りとか、佐賀語りって

やるのもいいんだけど、結局、佐賀の成り立ちとかから始めて、何か真面目腐ってて、しかも、こんな佐賀じゃなくて、長崎行ってやったら、長くやったら同じことが書けるわけですよ、どこの県だって。そうじゃなくて、うちの県だけしかない。だから、稲作が伝わって、吉野ヶ里遺跡がある、日本の中心がここにあって、名護屋城のときは20万人いて、そして、明治維新のときにはここから全てが始まった、技術移転がね、とか、うちだけなんだよそれはって、唯一うちの県だからだよとかね。例えば、SSP構想で、甲子園に2回優勝してプロスポーツにこんなに、何でもかんでもあるよということだったりとか、食材とか器とか、こんなに晴れやかで、有田焼なんてヨーロッパの王侯貴族がこんなに買い占めようとしたって買えないようなものだったんだよとかね、そんなのだけを並べて、薄くていいから、みんなにわあ、すげえ、佐賀はかっこよかにやって、それだけでいい気がするんだけど、こんなにいっぱいやったって読まないよ、私だったら。

だから、本当のうわあってみんなが盛り上がるようなやつを、佐賀の形、面積とかは要らないから、そんなものは。ちなみに人口密度は16位なんだけど、そういう刺さるところだけを言ってよ。

だから、本当にうちだけがあるやつをやって、都市的なものということだけじゃないんだけど、それって何なんだろうねというところだけはみんなに考えさせるような、そんな副読本を作って、予算はそんな大したことはないんだからさ、全員に1時間だけ授業するだけでいい、1回でいいじゃない、年に2回か1回、と僕は思うけどな。何となくこれ、結局教育委員会が作ると真面目に取り組んじゃうので、うちの自慢をここに書き出してさ、ばらばらって。

○落合教育長

学校の授業で使おうと思って教育委員会が作るとこうなっちゃうかなという。

○山口知事

だとすると、また眠い授業だなんて。やっぱり佐賀のことは古墳とか出てきてきつてなって、子どもの気持ちは分からないからさ、子どもって何かこう。

○飯盛（清）委員

知事に小学校を回っていただいて、さっきの熱意でしゃべっていただくとかなり効果があるような気がするんですが、やはり先ほど司会の方の一番最初にも出ました、先生、伝える教師がいかにもその熱を持っているかということが必要じゃないかなという気がします。

小学校は特に担任とのつながりが強いですから、担任の先生の言うことってかなり影響力ありますので、そこを高めるために、じゃ、どうしたらいいかなということを見ると、まず、初任者研修の中に佐賀学みたいなことは入れていただきたいなと思いますし、採用試験にも必ず問題を出すみたいな、そ

ういったことも考えられるかなというようなことを思いました。先ほどの熱が伝わってきて思いました。

○山口知事

だから今あれだよね、初任者研修だけ俺が熱を込めて言う。時間かかるんだよな。この4年ぐらいやってるかな、私。

○落合教育長

そうです、はい。

○山口知事

新任の先生に私が講演して、佐賀すごいだろうと教えて、先輩方が教えてくれとは言っているんだけども。

○落合教育長

県職員より先に教員にしてもらっています。

○山口知事

何かいい方法はないのかな、それ。

○牟田委員

直接委員が言われたように、講演に行ったらどうなんですか。

○山口知事

だから、行ったところというのが早稲田佐賀とかさ、唐津東とか、行った学校はそういうふうになるんですけども、佐賀工業とか。でも全部行くわけにはなかなかいかないから、組織的に、私一人でやっちゃってしょうがないんだよ。

○進政策部部長

そうですよね。根づいてほしいですよね。最初のカンフル剤はそれでいいですけど、どう定着させていくか。

○山口知事

結局、何度も何度もやっても、佐賀に何も無いなんて、都市的なもの以外は何でもあるんだけど、この県は。だけでも、その本質的なところを分かっていないから、ディズニーランドがない。ディズニーランドがないって何なんだって、どうでもいいじゃないか、そんなものだと思うけれども。

○牟田委員

ただね、知事をほめるわけじゃないですけど、私から言わせてもらおうと、もう随分意識が変わっている気がするんです。

○山口知事

する？

○牟田委員

するする。やっぱり佐賀のことを好きだという人たちがすごく若い子にも増えているんじゃないかと思うけど。

○山口知事

率的にはね。

○牟田委員

うん。だから、ちゃんと効果は出ていますよ。

○山口知事

そうですか。

○牟田委員

効果が出ている。

○山口知事

だって、やっぱり、いろんな大使とかが来ててさ、私が佐賀をすばらしいだろうって熱く語るから佐賀が好きになっているんじゃないかなというのはあって、何かつまらないところなんだよ、何も無いんだよって言うたら、大使直ぐ帰っちゃうよ。間違えたってなる。

○進政策部部長

なっちゃいますね。

○牟田委員

何もないって、最近割と大人もそんなに言わなくなったんじゃないかな。そうでもない？

○山口知事

新聞にはよくでている。「佐賀さいこう！企画甲子園」とかやると、必ず高校生は言う。必ずそこが前提で、佐賀には何もありません。

○落合教育長

佐賀について理解をした上で何をしたいというのを企画していくような感じになっていますよね。

○山口知事

だから、その大前提なんて誰が教えているんだろうという。

起承転結の起を。突っ込みたくなるよね、子どもに。高校生のプレゼンを聞いてるとさ。

○進政策部部長

そうですね。

○飯盛（裕）委員

小さい頃から伝えていかないといけないですね。教員が教える前に、親も、大人がやっぱり佐賀のよさをどんどん知ってもらわないといけないなって。

○山口知事

そうだね。だから維新博のときにそこに一番気づいたんだよね。親世代がやっと少し分かったという。

○飯盛（清）委員

維新博の場合だったら、特にNHK大河ドラマ「西郷どん」をやったときに、島津の殿様が大砲作りだったか、汽船だったか…「西洋人も人なり、佐賀人も人なり」という言葉が一言あって、私はおっと思って、やっぱり林真理子さん絡みかなと思ったんですけど、わざわざ入れてくれたのかなと思ったりしたんですけど、あの辺りの佐賀のすばらしさ、まさに維新博の。

○山口知事

あの辺りを表紙に立ててもいいし、今の努力すべしの、薩摩藩ですら佐賀はすごいと言っていることだとか、子どもに、それこそ今ワクチンの話があった、接種を率先してやったのは佐賀県だったとかさ、何かもっといきなり刺さるところからきたら？佐賀の成り立ちじゃなくて、山の高さベスト3とか、低い山を並べてベスト3とか書いてあるとかさ。

○落合教育長

教育委員会としては頑張って読みやすく書いてありますけど。さっき、牟田委員もおっしゃったように、世の中の的には変わりつつあるかなと思うけど、なかなかまだ変わり切れてなくて浸透していないけど、学校だけじゃなくて、大人も含めて変わらないと子どもたちが変わっていかないと思ってて、そういう意味で、ここの重い舵を切っている最中かなって。そういう努力はみんなしているんです。

○山口知事

だからなのかな、今コロナ対策で、県内宿泊キャンペーンとかやって、初めて佐賀県の旅館に泊まったという人がいっぱいいて、聞いてみると、結構佐賀にいい旅館があるんだねということで、常習化しているお客さんもいる。月に必ず2回は泊まりに来ると。

○落合教育長

なかなか地元の宿には泊まらないですね。

○山口知事

何で。わざわざ何で大分まで行くわけ、宮崎とか熊本とか。

○加藤委員

私のところは、去年の年度とその前、新型コロナで修学旅行は県内だったんですよ。それで、去年の修学旅行は、私はとても感動したんですよ。最初に行ったところが佐野常民記念館という三重津海軍所跡に行って、そこの佐野常民記念館の館長の熱い思いが、それですごく佐賀がこんなに素晴らしい県だったんだというのを私も改めて分かったし、子どもたちもその思いが伝わったのかもしれないですけど、最後までずっと聞いていて、そういったことって大事だなとかって思ったんですよ。やっぱり伝える人の思いが伝わるかどうかで人を変えられるんだなというふうなことを思いました。

それとか、次に行ったのはブルーナーズのスタッフの方たちが来られて、佐賀ブルーナーズ、バスケットを応援してくださいっていう、その思いもよかったんですよ。それで、できたらブルーナーズのスタッフになってくださいというような話とかがあったりとか、夕食は竹崎カニを食べて、カニ1杯を

生徒たち全員に配って食べさせたんですよ。そういうカニを1杯食べるという、食べ方も分からないから、それを教えてやったんですけど、すごく豪華な旅行でした。県から宿泊費の補助とバス補助が出たおかげでそういったことができました。

その前もすごくよかったですよね。呼子のイカさばき体験をして、それを日干しにする体験、というのをして、それで、生徒一人一人にイカの活け造りを食べさせたと。やっぱり呼子というのはイカが有名なんだよというのは子どもたちが分かる、そういった何というか、生徒たちはそれで先生たちが私たちを楽しませてくれているという思いがすごく伝わりましたという感想を書いていたんですよ。なので、ただ県内をツアーするんじゃなくて、県内のポイント、ポイントで体験を入れたりとか、有名なところとかというところも熱い思いを語ってくださるというのはすごく大事なことだなと思って、この2年間は、コロナであっても佐賀県内を子どもたちに浸透できたなというふうに思いました。

○山口知事

県内の体験って、あんまり。

○進政策部部長

いい機会だったと思います。

○山口知事

だよ。何で県外に行くんだらうって思うよね。家庭も、学校行事もね。佐賀の人って唐津に行ったことがない人が結構おるのよ。なのに、県内を分かって県外に行くんじゃなくて、県内に最初から行かずにグリーンランドに行ったりとかさ、ハウステンボスに行ったりとか。知らんのよ。何でかね。

○進政策部部長

あれじゃないですか。それこそ「もんだ症候群」というのはあれですけど、せっかくだからという感じじゃないですか。

○山口知事

せっかくだから。

○進政策部部長

どうせ旅行に行くなら、せっかくだから県外という発想で行っているんじゃないかなと。

○山口知事

でもね、わざわざ北海道まで行って修学旅行に行ったりしているんだよ。別に島義勇の勉強をさ。

○進政策部部長

ああ、まあそうですね。

○山口知事

何でわざわざ遠くへ、遠くへ行く症候群？

○進政策部部長

遠くへ行く症候群というのはあるんじゃないですかね。

○山口知事

でも、さっきの話を聞いて、俺、中学校のときの就学旅行が京都でさ、大仙院の和尚がえらい熱く語るんだよ、中学生に。妙に覚えていて、しゃべった内容から。だから、子どもってさ、熱い人がいるとすごい、こう、ああーって思うね。

○加藤委員

佐野常民さんを知ってくれという、ただそれだけのことじゃなくて、佐賀はこういうふうに来てきたんだよということをやっぱり話されるんですね。なので、佐賀は本当にいいんだよということじゃなくて、そのもっと根底の部分で話されるので、だから、佐賀が本当にすごかったんだという。ただ、言葉だけで佐賀はすごい、こういうことですよ、じゃなかったんですよ。

○山口知事

なるほどな。じゃ、ここで荒木さんがいかに佐賀をよそのとばかりから見てて、だんだん佐賀を好きになっていったのかについて語っていただけますか。

○荒木委員

私は、大学にいて佐賀の魅力に魅せられて、ずっともう20年います。ただ、やっぱり大人になってから住みやすさ、そして、食べ物のおいしさに気づいて、小学生だったら気づいていたかな、と思うと、なかなか気づきにくい。私には小学生の子どもがおりますが、先日子どもに、「東京のいとこに海苔とにじゅうまるを送るから、いとこにお手紙で、海苔とにじゅうまるの紹介をしなさい」と言いました。そう言うと子供は、一生懸命インターネットなどで調べて、少ない語彙力で、粒が大きいとか書くわけです。私がそれを見ていて思ったのは、やっぱりアウトプットってすごく必要だなということです。学校

には、いい資料がたくさんありますが、やっぱりインプットに終わってしまっていて、今の小中学生、大学生もそうなんですけど、課題発見とか解決能力にはとても優れている反面、そうなると、この間の「佐賀さいこう！企画甲子園」みたいに、佐賀には何もないけど…から始まる、テンプレートができ上がってしまうんですね。本当は、佐賀はこんなにいいものがあるから、それをもっと広げたい、横展開したい、発展させたい、そのためにはどうすればいいか…というようなプレゼンの仕方もあるはずで。それこそがパッションを持って皆さんに進めるぞという熱い思いにつながるし、普段から吸収しているインプットが生きてきます。どうしても何か課題を出すというと、SDGsも困っている、だから、こうするといい！と、いう論法になりがちですが、地域においては、こんなにいいところがあって、もっとほかの人に知ってほしい、外国にも広げたい！…みたいな前向きなことも話してほしいですね。そうすると、プレゼンなどでアウトプットするときに、佐賀に誇りを持てるようになるのかなって。何か大学生とか、自分の子どももそうですけれども、見ていて感じていました。

○山口知事

SDGsとかさ、全国で取り組んでいるんだけど、うちの森川海人プロジェクトと併せ技でやると、佐賀の取組というのは例えば先進的で、それとSDGsが急にかみ合っているからね。やっぱり一般化された、そういう何か全国的な宣伝に惑わされるところがどうしてもあるよね。でも、さっき言ったように、まずそういう価値の高いものをつくって、ネットでQRコードをつくってとか。

○進政策部部長

ああ、そういうのはいいかもですね。

○山口知事

政策部で考えて、一緒にね。

○前田政策総括監

はい。ぜひやってみたいと思います。

○山口知事

あんまり教育委員会にこれを任せると真面目な解説になるから。

○進政策部部長

不思議だったのはそこです。落合教育長が授業で使おうと思うとこうなっちゃうんですよというフレーズがそもそも疑問です。何で授業で使おうと思うと何でこうなるのが当たり前なんだろうか。

○落合教育長

だから、佐賀のことを知ってもらおうと。

○進政策部部長

もうちょっとこう、メリハリをつけるとか。

○落合教育長

授業でないところで使うにはいろいろメリハリつけるんですけど。

○進政策部部長

必ずしも教科書形にしなくてもいいのになという、こんな分厚く。

○落合教育長

だから、今までの考え方だとうなる、これはこれでいいのかもしれない。片一方で、知事がおっしゃったように、ここがすごいんだというところを打ち込めるようなものを必要なと。

○山口知事

4つか5つポイントでと思うけどね。ポイントで。

○進政策部部長

あと、やっぱりさつき荒木委員もおっしゃっていたように、私もこういう授業が多分あったと思うんですけど、僕は東京の小学校ですけど、杉並区というところだったんですけど、こういう授業をどうやったかは覚えていないんですけど、自分で考えてみると、グループワークして、それを見に行ったりしたんですよ、実際に。それはすごい覚えているんですよ。養蚕といって蚕の巨大な試験場があったところを見に行ったのと、あとは文化人が結構いて、シアターみたいなものがあるというのを、まさにこういう本から調べて、ここはすごいと自分でレポートを作ってグループで見に行ったんですね。だから、その2つはすごい覚えているんですよ。だから、杉並区というといまだにそのイメージなんですよ。

あと、中学に行ったときも、これの東京都版があったんですけど、下町に行って、下町の工場とバンダイのつながりみたいな。そこのバスは覚えているので、そういったことを考えて、自分なりにおっしゃったようにアウトプットして、それを見に行ったりすると、杉並区を本当に客観的に見ると、それがすごいことなのか分からないですけど、僕の中では、あれがあるという自分なりの思いはできるので、そういう思いが一度できると、その後、いろいろインプットを打っていても、そんなこともあるんだと

いう部分が広がっていくのはあります。

○山口知事

そうだよ。広がっていくよな。だから、子どもの頃っていろんな体験でシナプスを刺激するというのはすごく大事だよ。同じような毎日じゃなくて、単調な。

○進政策部部長

だから、言われるだけだとですね、ディズニーランドとか、ああいうのと同じになっちゃうと思う。テレビで見てすごいなと、授業で聞いてここはすごいなと。子どもの興味関心だとそっちのほうがすごいかなみたいに、なっちゃう感じもしました、今聞いて。

○落合教育長

確かにインパクトがね、授業の中でこれを勉強として習っても、インパクトがないとやっぱりそういう実地に何かを勉強するというのは、すごく刺さるじゃないですか。

○山口知事

刺さらないと覚えなしね。

○進政策部部長

覚えなしですね。身にはついてこないですよ。

○牟田委員

だから、スタートの素材としては意味があるわけね。

○進政策部部長

はい、と思います。

○牟田委員

で、ちょっとまた僕話題を変えていいですか。先ほど知事がスタートのときに言われたように、子どもたちだけでどっかに行くというのが、そういうのはないなと思って。

○山口知事

それはどうしてだろう、俺も聞いたかったんだけど。

○牟田委員

あれは多分、中学校とか小学校の指導が原因なんですよ。

○落合教育長

中学からはそういうのはないですけど。

○飯盛（裕）委員

小学校は小学校区から出ちゃいけませんっていう決まりがある。

○山口知事

誰がそんなこと言うの。

○飯盛（裕）委員

市の教育委員会から。

○山口知事

拘束されているの？

○飯盛（清）委員

昔はそんなのなかったですよ。

○山口知事

ないよね、だって。

○飯盛（清）委員

私も好きなようにあちこち行っていましたが。ただ、やっぱり校則がだんだんだんだん厳しくなっていて、あれと同じで、じゃ、例えば、1年生があんなところまで行ってこんな目に遭ったから、もう1年生はここだけにしよう、校区内だけにしよう。

○山口知事

それはだから校内暴力の時代じゃないですか、

○落合教育長

それは荒れた時代にだんだん厳しくなって行って、そこを解除できないところがあるんですよ。その名残が。

○飯盛（清）委員

中学、高校の制服の下着とか、そういったところばかり視点が当たっていますが、小学校のその今の部分なんかはやっぱりまさに何とかしたほうがいいのかなという部分ですね。

○牟田委員

うちの息子は小学生は10年ぐらい前でしょう。勸興小学校でも多分あった。それでね、学区外に行っちゃいけない子がいる。学校が終わってからって、学校周辺をうろうろしているだけだった。

○落合教育長

また改めておっしゃったんですけど、やはりほとんどの小学校であります、制限が。

○山口知事

何で。

○落合教育長

理由は、やっぱり先生たちとしてはいろんな危険があるというのを心配して、そういうのを……

○山口知事

学校にいるときはともかくさ、ふだんは自由でしょう、子どもはね。

○落合教育長

学校側が縛るといって、僕も問題意識があつて。

○飯盛（清）委員

生徒指導の担当として、そういった子が発見されたときに指導しないといけないときに、何でいったら、私は中心じゃなくて、ちょっと佐賀市内でも外れたところだったので、繁華街というのが佐賀ははっきりしていると。そこに行くと、いろんな怖い人がいるのよと。

○山口知事

進部長も杉並区から出たなとか。

○進政策部部長
出ていました。

○山口知事
出てるよね。

○進政策部部長
遊びにも行ってましたしね。

○牟田委員
中学校はそんな縛りはなく自由なの。

○落合教育長
ないですね。

○牟田委員
その割には佐賀の中学生って知事が言うように電車やバスで出歩かないね。

○山口知事
そう。何で。

○牟田委員
自転車では動いているのかな。

○落合教育長
自転車では動いていますね。

○飯盛（清）委員
中学生は、以前は制服で行きなさいというのがありました。

○落合教育長

それは今もあるかもですね。

○山口知事

だから、学校教育で守られたところからの断層が激し過ぎちゃって、もう少し社会経験を積んでいないとき、いきなり急にどうぞって、自由でって言われてもさ。

○進政策部部長

急に言われてもできないですよ。

○落合教育長

今回調べてみると、学校の先生はいろんなことを心配してそうしているんだけど、本当に今、そういうリスクがあるかどうかというのは改めて検証されていないんですよ。

○山口知事

リスクは常にあるからね、生きている以上。誰であつてもさ。

○落合教育長

それぞれ家庭でどこまでそのリスクを子どもにチャレンジさせるか、学校が一律に制限するというのはどうなんだろうと。

○山口知事

少なくともそれは言えるよな。だから、学校の縛りがきつすぎるといふか、生活に至るまで。

○落合教育長

さっきそういうリスクを避けるためにそうしているものを緩めると、相当学校も勇気が要るんでしょうね。家庭から期待されている部分もあるわけですよ、学校で制限してくださいと。最初、知事がおっしゃったように、学校と家庭、地域との役割分担っていうのはすごく学校側に寄っている、そういうことは感じます。

○山口知事

まさにそこは教育委員会で議論してほしいところですね。僕らがあんまり言うのもなんだけど、ちょっと強過ぎるという気がするけど、僕はね。

○飯盛（裕）委員

そのあたりは、本来親がやらないといけない教育じゃないですか。そこを何か学校に押しつけてるじゃないですけど、やっぱり親はちゃんと親として子どもの教育をして、個人的には学校内で起こることに関してはしっかりお願いしますよ、学校にはお願いしたいんですけど。校門を出たら親の責任かなと、個人的には思いますけれども。

○山口知事

俺もおかしいと思う。それをいかに、多分社会的に、例えば、なかなか家に帰っても親がいらっやらない家庭とか、いろんな家庭もあるので、そうすると、学校側に管理してもらいたいという親が一部いるということは、何となく感覚的に分かるけれども、ただ、だからといって、全体的にそっちに寄り過ぎると成長を妨げることにもなるから、その辺のバランスだと思う。

○落合教育長

校則の議論のときも感じましたけれども、学校は負い過ぎてるかなと思いますね。

○山口知事

そう。それこそ、先生に負担がかかり過ぎというか、リスク管理も含めて。

○落合教育長

登下校までは学校もある程度管理しないとイケないけど、家に帰った後のことはやっぱり家庭と地域とがしっかり。

○山口知事

地域ね、社会。

○落合教育長

と思いました。

○牟田委員

その問題は、僕も教育委員も3期目に入って9年、ずっと教育委員会で出ている。これはもう長いから分かる。やっぱり家庭が道徳とか、そういうことを学校に求めているというのがいつもぶつかる気がする。だから、なかなか変えていかなきゃいけないんでしょうけど、大変だと思っています。教員の方の負担になっているのをよく感じます。

○山口知事

だって、解除ができないからですよ。1回何か事件が起きて、学校側が厳しく規制をしたときに、それを緩めるということは学校はやらないからね、基本的には。学校側のリスクだから。そうなると、どんどんどんどんきつくなっていくという傾向があるので、そこを一旦、もう一回議論をして、フラットなところで線に戻していくということは必要だと思う。

○落合教育長

個別の学校の責任じゃなく、ある程度教育委員会がそういうメッセージを発しないと、難しいのかもしれないですね、学校を変えるって。

○山口知事

だって、自分の学校だけだと校長はしきらんと思うよ、なかなか。

○飯盛（清）委員

自分がいる間だけはもう。いずれ転勤するからですね。

○山口知事

全体としてそうしていこうよというコンセンサスを。

○落合教育長

校則のときもこっちから強いメッセージを発しましたが、こういうこともそうなんでしょうね。

○山口知事

これは結構広がったね。ここで何か議論していて、うちの県だけじゃなくて、よその県まで広がっているからね。下着の色から何から。

○進政策部部長

ニュースでも取り上げられて。

○牟田委員

落合教育長ならやっているといます。

○落合教育長

ありがとうございます。頑張ります。

○前田政策総括監

この点はそろそろよろしいでしょうか。もう一つ今日テーマがございますので。

○山口知事

もう一個あるの。

(2) 意見交換（令和4年度の重点的な取組について）

○前田政策総括監

もう一個、教育委員会の令和4年度の重点的な取組についてということ。

○落合教育長

時間が迫っていますので、簡単に説明させてもらいたいと思います。

教育委員会の来年度の主な取組ですけど、あくまでもコンセプトは児童生徒が高い志と理想、郷土への誇りをもって困難に立ち向かっていく、たくましい「生きる力」を育成したいということで取り組みたいと考えまして、重点プロジェクトは今年度から取り組んでいる3つ、唯一無二の誇り高き学校づくり、プロジェクトE、部活動改革、それに加えて4番目のさがすたいるスクールというのを加えました。それと、大きな課題である教員の人材確保、この5本柱で重点プロジェクトとしています。

唯一無二の誇り高き学校づくり、それぞれの学校が特徴を生かした強みを磨き上げて打ち出していきたいよ、ということをやっておりますけど、来年度は、重点校4校にコーディネーターを入れて、全体の手本になるような取組をやりたいと考えています。

そういった取組を県立学校の場合、外に発信していくというのは非常に今まで意識がなかったもので、それを強力に来年度いろんなツールを使ってやっていきたいと考えています。

プロジェクトEは、もともとはコロナ禍のオンライン授業から始まった、そこがフェーズ1だったと思うんですけど、今度フェーズ2、さらに進化させていきたいと考えていまして、1つは市町のをしっかり、県立はある程度全国でも進めたほうですけども、市町もしっかりサポートするというのと、今、ICT、佐賀県が進んでいる部分、学力向上にもしっかり生かしていきたいというふうに考えています。

部活動改革は、先日、今年度の最後の委員会をしました。学校だけで頑張った部分を地域と一緒にしっかりと全体を盛り上げていこうということで、それで全体を「SAGA部活」と呼んで、学校から地域まで含めてやりたいなと思っています。

来年度、いろんな予算をいただいて支援していきますけど、最終的には、SSP構想の中核を「SA

GA部活」が担っていくという思いで、これに取り組みたいと思います。

さがすたいのスクールプロジェクトは、県が進めていただいています、さがすたいのコンセプトを学校にも生かしたいということで、誰もが安心して学べるやさしい学校をつくっていきたいと思います。

校則の問題、あるいはいじめ不登校の問題、生理用品なんかもありましたけれども、来年度特に夜間中学について議論をしっかりとしていく必要があると思っています。

特別支援教育に関しては、これは施設整備になりますけど、鳥栖の方へ新しい学校をつくるということで進めてまいります。

最後に、教員の人材確保ですけど、これは小学校1.4倍、全国一番下のレベルになっています。大きな危機感を持っています。いろんなチャレンジ、年齢制限を撤廃するとか、いろんなことをやっていますが、来年度はU J Iターンをさらに強化するのと、あと、唐津の離島枠というのをして、そっちで働きたいという人をぜひ呼びたい。真ん中のほうは、これは東洋経済にも取り上げていただきましたけど、秋の採用、年2回、採用のチャンスを与えると。それをしっかり情報発信していこうと考えています。

以上です。

○前田政策総括監

ありがとうございました。

それでは、意見交換をお願いしたいと思います。

○山口知事

いいんじゃない。佐賀の教員たちにさ、佐賀の教員だということで特別感を持ってもらいたい。佐賀の教員だと。

○落合教育長

熱い思いを語れる先生をどれだけ増やせるかというのが。

○山口知事

何とかティーチャーとか指定しているんじゃないの、これは。スーパーティーチャー、あれは関係ないか。

○落合教育長

スーパーティーチャーは授業のスペシャリストを認定しています。

○山口知事

熱い佐賀についてすごく強く語れる人がいたら、谷口君みたいな。

○落合教育長

いろんな分野で熱く語っている先生はいらっしゃるんですけどね。ふるさとについてどれだけ熱く語れるか。

○山口知事

谷口君の子どもとか幸せだよね。おもてなし隊の小学校の教員なんだけれども、子どもたちが喜んじやうなあ。

○進政策部部長

ありますね。

○落合教育長

そういう先生がいると、学校、子どもたちが盛り上がりますよね。

○山口知事

盛り上がるよね。

○落合教育長

唯一無二の学校づくりも、今までどっちかという、県立横並びで公平にというイメージだったんですけど、これから先はそれぞれが生かす、ある意味、県立の間でも競争、そういう意識が少しずつ出てきたかなって思います。

○山口知事

だから、何かね、今、県立高校って自分の高校だという意識を教員には持ってもらおうというふうにもっともっと。私学なんかは何十年も、30年も40年も同じ学校で教員してるもんね。だから、懐かしいよね。

○進政策部部長

そうですね。

○落合教育長

戻ってきたりですね。

○山口知事

戻っていったりするとき。そこまでしなくてもいいけど、人事異動していいけど、ある程度校長とかも。

○落合教育長

自分のホームはどこかというのは持ってもらいたいなど。人事異動にはたまにはあるでしょうけど、自分のホームグラウンドはあそこだというのは持ってもらいたいなど。

○山口知事

そっか。でもあれだな。校区の問題って、佐賀市だけじゃないのかな。伊万里もそうだったな。

○落合教育長

佐賀市だけじゃないです。調べましたけど、大体全県で、小学校に関しては。

○山口知事

僕はでも、昔のあの時代の人かな。

○前田政策総括監

ありました、ありました。小学校はありましたけど、中学校になったらもうなかったですね。ただ、やっぱり制服で校外に行ってくださいと。そういうのはありました。

○落合教育長

言い訳になりますけど、ちなみに佐賀県だけではないです。九州各県同じように。

○山口知事

守るべき校則は守らせなきゃいけないと思うけどね。ただ、その辺がごちゃごちゃになってき。だから、たばこ吸っちゃいけないというのはだめだよな。何かそういうやってはいけないことと、ごちゃごちゃになっているのが私は気になってるんだ。

○落合教育長

プライベートなものとか、学校ではない、外側のことまで規定しようとしているのは確かに減りましたね。

○飯盛（清）委員

校長時代にそのときの課題は働き方改革が出てきた頃で、教育委員会のほう、あるいは文科省のほうから働き方改革というのが下りてきていると。国もこんなこと言っているから、今までこれはしていましたけれども、しないようにしますというふうになると非常にやりやすかったですね。だから、校区外のことにしても、上からこう、ちょっとメッセージを県内全体に発してもらって、あと、それぞれの学校でどう判断するかという持っていき方をすれば、校長はやりやすいんじゃないかなという気がしませんね。

○飯盛（裕）委員

知り合いのいろんな若手の先生たちと話をしていると、トップダウンでいろいろ教育委員会から下りてくる。でも、現場は現場のこういうのがちょっと減ったらいいなという声も結構あると思うんです。だから、そういうのを吸い上げて変えていくようなプロジェクトチームでもあればいいのかなと。ただの校長会、教頭会というのは定期的にやっていると思うんですけど、横の並びで、A校の先生、B校の先生の代表、C校の先生と集まって、うちはこういうことをやっているよとか、こういうことが変わればいいなというのを校長先生たちも入っていろいろ議論していくと、若手の人たちの意見も吸い上げられていくなど、いろんな人の意見を聞きながら思いました。

○山口知事

だから、現場を持っているのは教育庁、教育委員会だけさ、俺たちは自分の現場じゃないので、好きなことをしゃべっているけど、そこはぜひ教育委員会の中で現場の話も聞いて。

○落合教育長

小学生の保護者としてどう感じましたか。

○荒木委員

何か佐賀駅に集まって、今から白石町に行くよとかいうのがあったら絶対参加させるなどか思ったんですけど、私はそうでもないんですけど、すごくいま治安が悪くなっているという意識が親の中にあって、何か少し不審者が、よく来ますよね、3週間に1回ぐらいは不審者が何々町にいましたから、家にいてくださいみたいなメッセージが佐賀市教育委員会さんから流れたりとかして、どうしても親御さんとしては何となく不安な感じに思ってしまうかねないようなメールが、注意喚起のメールがいっぱい来

ていて、そういう気持ちになるというのもよく親御さんの立場から見たら分かるなと思うんですけど、誰か大人の人が責任者でいてくれて、休日に佐賀駅に集まって、子どもだけで白石に行って、何かみんなのできることを探してみようみたいなのがあったら、親とファミリーで、家族旅行で行くよりも、違う経験ができるんじゃないかなとか思ったりして聞いていました。

○山口知事

修学旅行で生徒たちだけで行かせるってやつはやっているんだっけ。あれは高校になってからだっけ。

○飯盛（清）委員

現地ではやりますが、全体はやっていないですね。

○山口知事

だから、子どもたちだけでチームで5人ずつで、それこそ京都のまちに行ったらね。そういうことはもっとできる。知らないまちでやれるんだから。

○進政策部部長

そうですね。面白いですね。それはやっているんですか。

○山口知事

それは聞いたことがある。

○飯盛（清）委員

修学旅行先でも、もう今は携帯があるからですね。そのときだけ臨時で携帯をそれぞれグループに1台渡して、何かあったときにはすぐ先生たちと連絡を取ることができるような時代ですので。

○山口知事

だから、ばらばらになって行って。

○進政策部部長

行けますね。

○山口知事

先生が一番楽しみたいだけだね。

○荒木委員

お友達同士と一緒に時間を過ごすというのはすごくいいなと。家族旅行とも先生の監視下でもない場所で新たなことが入っていくんじゃないかなと期待したいです。

○飯盛（裕）委員

学校の携帯とかを貸し出しできるなら、GPSの位置情報を共有しておけば、あ、Aグループ来ていない、どこだと思えば。

○進政策部部長

今分かりますからね。

○山口知事

そういうのを仕組んでも面白いね。できる限り管理下じゃない場所で。

○飯盛（裕）委員

さっき言われた警察からの通知とか、不審者が出ましたと来るじゃないですか、本来であれば、地域全体で見守っていくべきかなと思うんですけど、どこだったか、うちの近くの校区で、コンビニの前で「何年生ね」と聞いたと。それが不審者になったと。それが不審者になると、今度地域の方は全く話しかけられなくなるなということも、ちょっとそういうのもありましたね。

○山口知事

すぐメールが回るよね。

○荒木委員

3週間に1回ぐらい回りますよね。

○山口知事

これはうかつに声かけられない。私、結構声かけるから。

○進政策部部長

不審者。変なおじさんに声かけられたと。

○山口知事

「ちゃんと勉強してるか」と声かけてきました。

○前田政策総括監

そろそろお時間でございますが、よろしゅうございますでしょうか。

○飯盛（清）委員

佐賀県の1.4倍、小学校の教員採用率の低さは、秋の採用試験、ある意味期待といたしますか。

○山口知事

何でなの。よくなった、少し。

○落合教育長

まだ少なかったです。

○山口知事

これから。

○落合教育長

はい。

○飯盛（清）委員

それをするために、秋の採用というのは他県で残念な結果に終わった人とか、同じ日に受けられなかった人のための採用、あるいは期待といたしますか、今1.4倍と低い時代が続いているので、苦勞せずに入れているから、すぐやめる先生も多いみたいで、ここら辺も合わせて考えていかないとというふうに思っています。

○山口知事

佐賀県って人気あっていいはずだけどね。佐賀県の職員って本当に恵まれていてさ、どこに家があったって帰れるんだよね。長崎県と全然違うよ。

○進政策部部長

転勤制で。

○山口知事

大変だったよ、対馬に行ってるのとかさ。だって、広いじゃないですか。佐世保と長崎はあんなに遠いのに、うちだったら伊万里だって1時間二、三十分でしょう。

○落合教育長

佐賀県はどこでも帰れます。

○山口知事

だから、そこは売りだよね。

あと、秋採用いいよね。うちもだから、秋異動は佐賀県ではできるんですよ。10月異動って結構佐賀県って大事で、県庁の人事異動で。長崎にいたときはできなくて、家族の異動を伴うと。子どもが転校に不利。

○前田政策総括監

ほかにごさいませんか。よろしいでしょうか。

○山口知事

何か最近、教育委員会もいろいろ考えていただいて。

教育委員会というのが一番教育庁の上部組織なんだよね。

○進政策部部長

そうです、一番上部の組織です。教育委員会がある。

○山口知事

この教育委員会で合議して決めたことということが大きな方針で、だから、教育庁は教育委員会のその事務局なんだよね、違ったっけ。

○落合教育長

そうです。

○進政策部部長

そうですね、教育庁というのはそうです。

○落合教育長

教育委員会の事務局。

○進政策部部長

ただ、昔は教育委員会委員長みたいなのは今兼ねているんですね。

○落合教育長

今は兼ねています。

○進政策部部長

だから、教育委員会のトップも兼ねている。

○落合教育長

昔は教育庁と教育委員会と。

○進政策部部長

委員会の事務執行機関でもありますけど、教育委員会の委員、昔で言う委員長の仕事もしている。めちゃくちゃ権限をお持ちです。

○山口知事

ここのメンバーの取り仕切りもしているし。

○進政策部部長

トップでもある。昔は完全に事務だけ分けていた。教育庁と委員会と。

○落合教育長

事務局長みたいになって。

○山口知事

だから、そういう意味で、知事は、首長は民主的統制で、選挙で選ばれているから、皆さんは俺の補助の機関になっているんだけど、こちらは統制じゃないから、一応議会には指名を受けているけど。ただ、ここで委員会制度にして、ここで合議をすることによって、えらいんだよ、ここ。

○進政策部部長

そうですね、この方々が、教育長待った、と。

○山口知事

そうか。だから、飯盛（清）先生が僕に言うのは、自分に返ってくるということですね。

僕らは、だから予算と、あとは教育長の人事だけで。

○進政策部部長

そうです、そうです。あとの実際はこの皆さんで。

○山口知事

こういう一応制度になっているということを改めて確認をしました。

4 閉会

○前田政策総括監

それでは、以上をもちまして会議を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。